

玖波宿の中心地本陣跡に立つてみよう

篤姫、玖波本陣（洪量館）に御泊り！

嘉永6（1853）年9月11日、篤姫他258名の一行が玖波宿に泊まりました。

上田家文書「御公用日記」の日程表には「玖波・宿」と記されており、「岩邑年代記」にも「今日大橋（錦帯橋）御廻り。児玉屋（木野・中津原の津屋）え御小休。今晚久波（玖波）御泊の由。」の記述があります。

玖波に近づくと、ばらばらに進んできた行列一行は、橋の手前で笠を冠り直し、乱れた服装を直し隊列を整えてから、出迎える庄屋の案内で、歩調を整えて歩き始めたことでしょう。

篤姫の将軍との結婚が岩国の城下町で評判になっており、多くの人が出迎えたと思われま

さて、前述の「御公用日記」に薩摩藩から広島藩への、篤姫一行の通行のための「挨拶状」が記載されていて、その日付は8月16日になっています。

他藩領内の通行儀礼が大名間にあり、互いに使者をもつて挨拶することが行われました。

洪量館と臥龍の松

西国街道玖波宿の本陣は、館号を洪量館と呼ばれました。

この地は、背後に国境の山々が連なり、前方には神の島嶼島を眼前に眺められ、その風光明媚なことは、早くから近隣の国々に知れ渡っていました。その上、前庭には高さ20尺（約6.1m）余りの古く珍しい枝振りの老奇松があったり、臥龍の如くその地を這うように左右に伸びたり、その枝は、実に130尺（約39.4m）余りにも及んで、眼前の勇姿に圧倒されるようだったということ。そして洪量館の景色に一段と趣を添えていました。

この老奇松は、藩の家老上田重安（宗箇）のお手植えの松であると伝えられ、来館する歌人好題目となりました。

尚、同じように宗箇お手植えの橙の大樹も庭にあったと伝えられています。



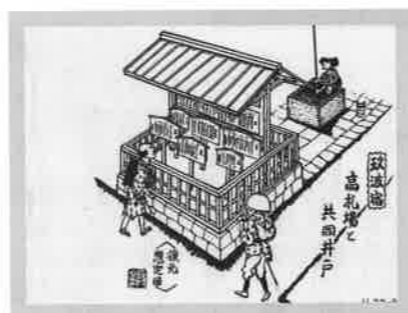
玖波の高札場跡と角屋釣井

24 玖波の高札場跡と角屋釣井

高札場は、宿場のほぼ中央、現在の胡神社の所に設けられていて、法度・掟・条目・禁令や次の宿場迄の定賃銭などを板に書き、文政2（1819）年には12枚立てられていた。

高札場跡の後側に、石畳に囲まれた立派な井戸があり、切石の枠組をもつ井戸で、海の傍ながら豊富な清水が湧き出している。地域の共同井戸・防火用水として、その他人馬の継立の際などいろいろ利用されていた。

また、この井戸は行者山へ登る修行者の寒行の水垢離の場にも使われていた。



玖波の高札場跡と角屋釣井（想像図）

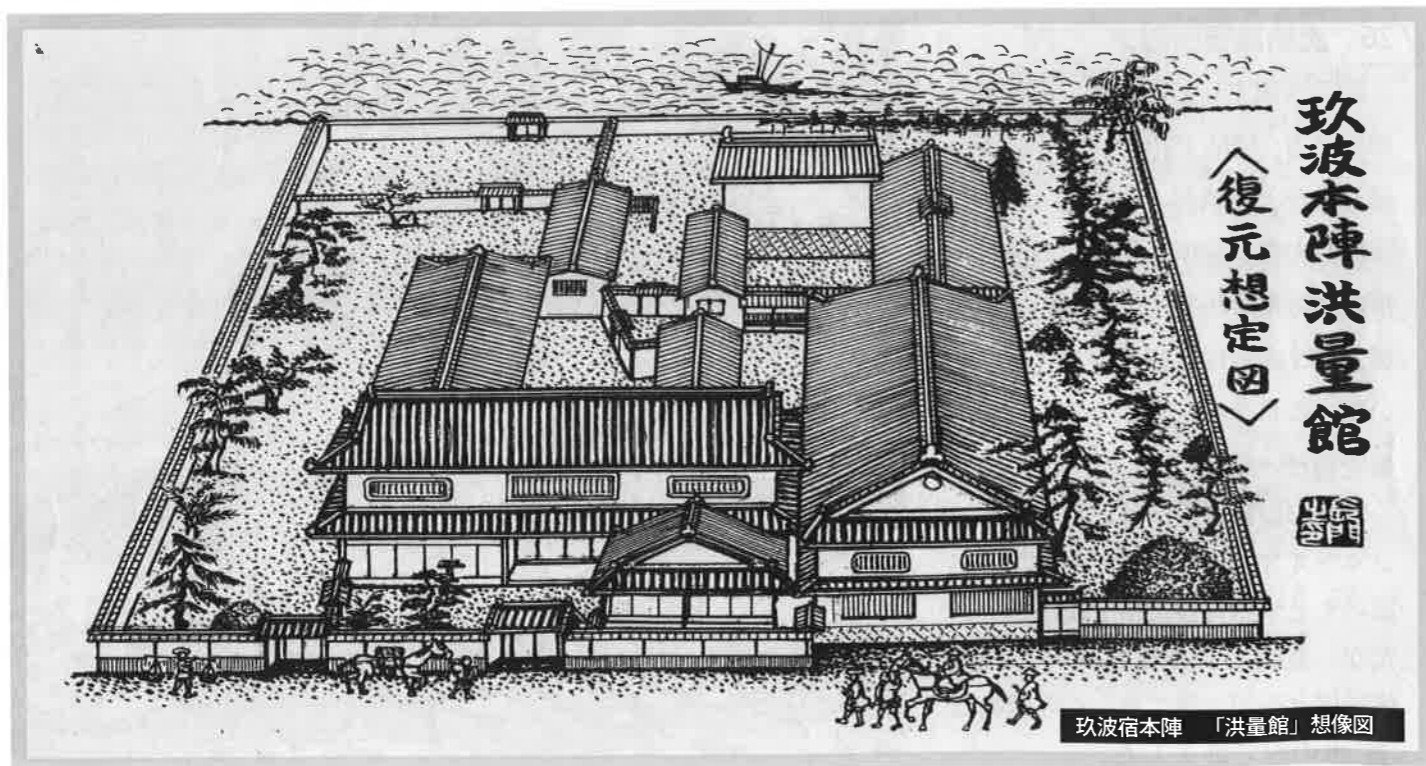
23 玖波宿本陣（御茶屋）跡「洪量館」※

「本陣」とは、江戸時代の大名や役人が利用した宿舎（大旅館）である。

寛永12（1635）年に参勤交代制が確立、玖波本陣も新屋（平田氏）宅を本陣として整備された。上田氏の儒臣、福山貞儀が、宝暦7（1759）年、本陣から一望できる満々と潮を湛えた内海の景色を讃えて「洪量館」と名付けた。本陣は街道に沿って敷地の長さ21間半（約39m）、18畳の大広間の外、14の部屋から成る大規模なものであったが、長州の役兵の火で焼失した。

ここに来遊宿泊した文人墨客の後に残る名文も少ない。

大歳神社には江戸時代後期、神主と文人の交流で詠まれた和歌が残っている。



玖波宿本陣「洪量館」想像図

20 玖波口屋番所跡※

元和5（1619）年、広島藩が玖波・廿日市などに材木留奉行を置き、材木の搬出を取り締まったのが口屋番の起こりという。

藩の勘定奉行は、林野生産物の取り締まりを行い、木材・炭・薪を口屋番所を通じて藩の納屋所へ収めさせ、諸方へ売りさばいた。また、同時に税も取り立てた。

「周防秋穂八幡宮旧記」の応仁元（1467）年の記事に、「久波津問丸（問屋）が八幡宮の屋根を葺くのに必要な粉板（そいだ薄い木の板）を吉和村で作らせた」とある。

玖波は古くから木材などの集散地で、現在も木場という小字名が残っている。

問丸

中世、交通の要地の港などで、年貢米や物質の保管・委託販売などの商品中継業務に携わった業者。江戸時代、問屋へと発展した。

定賃銭

次の宿場までの賃金で、高札場などに掲示された。



23 玖波本陣（御茶屋）跡「洪量館」

24 玖波の高札場跡と角屋釣井

20 玖波口屋番所跡

大歳神社

鍵形街道